

「昭和」の「男はつらいよ」

畑 康樹

神奈川はた皮膚科クリニック

今回のお題をいただき、大げさだが自分の人生を振り返ってみた。

物心がついたころの家庭環境は祖母・父・母・姉との5人家族で、父はいつも仕事で帰りが遅く、祖母・母・姉と周りにいたのは圧倒的に女性だった。多感な中高6年間は男子校で育ち、浪人時代に優秀な女性たちと一緒に勉強したときに受けたカルチャーショックを昨日のこのように覚えている。

大学に入ると当時の医学部は女性が少なく、全体の1割程度であった。が、なぜか出席番号の前後は女性が多く、ポリクリで3人グループに分かれると男は1人であった。「内視鏡をやってみようか」と先生がいうと、みんなが私のほうをみる。チャレンジ精神はこころに養われた気がする。

医局に入局すると、これまた同期で男は私1人。前後の学年でも医局に残った男は私1人だったので、当時は必然的に医局長の仕事が回ってきた。医局長の仕事は大きな人事異動には関与しないものの、パート医師の手配など渉外的なことが多い。私が入局して以降は圧倒的に女性入局者が多く、やはり女性とのやり取りが多かったと記憶している。

12年の大学病院勤務ののち、済生会神奈川県病院に異動となった。大学からの派遣は初めての病院ということで、部下と2人でとなったが、この部下が妊娠中で、働き始めて2週間で産休に入るという状況になった。当時の西川武二教授が、院長にその旨を了承いただくために一緒に挨拶に行こうと行ってくださった。教授・院長と面談した際、院長は外科の先生だったが「そんなのは当然の権利です」と笑ってうなずいてくださったことも思い出深い。それから17年、病院勤務を続けることになるのだが、思い返せば部下はすべて女性だった。

私は自分が初めて病院に出張していた時代、病院の指導医からすべての地方会で発表するという機会をいただいた。落ちこぼれだった私がかろうじていまでも皮膚科医としてやっ



ていけているのも当時の鍛錬のおかげだと思っている。そこで自分が指導医になったからには、部下も同じように育てなければと思い、ほぼ毎回の地方会での発表を心がけた。いま思えば、パワハラといわれかねないが、優秀な女性の部下たちは皆その課題を十分にこなし、私が書かなかった論文もたくさん書いてくれた。感謝している。

そして開業して7年が経過した。事務長でもある妻、スタッフを含め私以外、全員女性である。開業している先生から、もっとも厄介なのは人事であるとよく聞かし、実際もその通りである。事務業務は家内にある程度任せられるので助かっているが、その分、家に帰ると愚痴を聞くのは私の仕事である。

いまの家庭環境は妻・一姫二太郎の4人家族であるが、息子は家を出ているので、自宅に帰れば妻と娘がいて、やはり周りは女性である。妻から息子は皮膚科医となったが「父さんは皮膚科医だったのになんであんなに家にいなかったの」と言っていたと耳にしたときには愕然とした。そして妻・娘から「あなたは昭和の男だから何も（家のことは）しない」と愚痴をいわれる。

2024年の流行語大賞を受賞した「ふてほど」（ドラマ『不適切にもほどがある！』の略語）は楽しくみさせてもらったが、自分もタイムスリップしたのかとふと思う今日このごろ。平成・令和生まれにはどう転んでもなれないのだが。